

「発想法 (KJ 法)」はじめにの変化から読み取る 川喜田の意図の検討

永 野 篤

(キャリア開発総合学科)

I. 本論の論点

川喜田二郎 (1920-2009) が提唱し後に KJ 法と呼ばれる技法は当初彼のフィールドワークの報告・論文における啓発的発想法として創出された。それが公表されてからは企業における問題解決の技法として企業研修に多く取り入れられ、後に質的研究のアンケートの集約やナラティブ的インタビューのまとめの手続きとして GTA (注1) とならぶ選択肢として採用されるようになった。川喜田は当初、この方法を誰でもが自由に使えるものとしてその手続きを公表したのであったが、後年商標登録 (注2) し著作権についても裁判で争い (注3)、その使用についても制限をかけるようになった。このような変遷を経ているものの、手法や名称が一般に浸透していく過程では多くの賛同者・協力者が存在している。そのためか「KJ 法」の名称ならびにその技術活用に関する制約は曖昧となっている。こうしたことからそこで生まれた成果において KJ 法の質が担保されているのか否かについても検証されていない情勢となっている。このような環境において“KJ 法を活用した”とされる学術論文等の構成・妥当性について精査されることは急務であると考えられる。

しかし川喜田が元々志向していた発想法とはそもそもどのようなものであるかを明らかにすることの方が先行的により重要であると筆者は捉えている。志向そのものが明確にされなければ妥当性を検討することは難しいか

らである。川喜田の KJ 法上の手続きにおける変遷についての研究もなされている (注4) が、技法論に焦点があり彼が求めていた思想と技術の一体論について深く洞察するには至っていない。それを論じるための材料として彼の著作物一切を対象とするアプローチが考えられるが、その膨大な研究の前調査として議論の材料を KJ 法の思想・技法紹介の原点である川喜田二郎著『発想法』の「はじめに」(序論)の初版と 40 版との変化に着目することにした。現在出版されている『発想法』は 40 版以降であり (そこには初版の「まえがき」の掲載はない)、通常この著作を読む場合には 40 版の「まえがき」にのみ目を通すだけである。しかし、初版において彼が志向していたことは比較的明確に示されており、その一方 40 版においてはそれが達成されない現実の中で、彼自身でなければそれは達成されないであろうことが表明されている。この両者を比較し、新書で簡易的で分量が比較的少なく一般向けに書かれた作品とはいえ、その分、人口に膾炙し多くの人に読まれることが想定されている著作物の記述の変化を精査し、KJ 法において彼が実現しなかったのは何であったのを抽出することはこの技法を用いて問題解決・論文作成に取り組む人々にとって有意義であると判断し本論の論点とする。さらに 40 版から 8 年後の 1984 年に追加された「あとがき」も参考材料として検討する。

II. 論の展開方法

『発想法』の初版の「はじめに」と40版の「はじめに」のそれぞれの論旨を比較し相違を明らかにする。(1)最初に全文を紹介し(資料(A)、(B)/段落に通し番号を振った①～/原文は縦組み・年月漢数字を、横組み・アラビア数字とした)、次に(2)全体的な骨子を明らかにする。その上でそれぞれの特徴について述べ(3)(4)、相違発生背景を川喜田の活動(主に出版された著作物)との連動(5)を考慮し最後に考察する(Ⅲ)。

(1) 全文紹介をする

初版まえがきと40版まえがきはそれぞれ8段落、9段落となっており、1段落目と2段落目は同じ内容で、以降異なっている。

資料(A) 初版「はじめに」

- ① ここで扱う「発想法」すなわちアイデアを創り出す方法は、発想法一般ではなく、私の案出した発想法に限られている。発想法という言葉からして、私なりに位置づけたそれであることを、御諒解いただきたい。
- ② その発想法は、もともと野外科学の必要性から始まった。ことに、野外で観察した複雑多様なデータを、「データそれ自体に語りしめつつ、いかにして啓発にまとめたらいいか」という課題から始まっている。かような課題は、科学的方法論としては、今日までまともに解決されたことはなかったのである。日本ばかりでなく国際的にも未解決である。現状においては、その必要性の根源となった「野外科学」という用語さえ、まだきわめて通りが悪い。その意味するものが何であるかは、本文をご覧いただきたい。
- ③ 二、三の習作的な試み(多くは未発表)ののちに、意図的に発想法を用いたのは1954年ころであったろうか。それは前年にヒマラヤを訪れたときの、民族地理学的観察データをまとめるにあたってである。その結果は「ネパールヒマラヤにおける民族地理学的諸観察」(和文・英文)として発表されている。いまから思えば幼稚な作品であるが、それでも各国の専門誌が好意ある書評をしてくれた。それは単に観察資料の網羅的記載ではなく、読者に啓発的暗示的なものを与え得たからだと思う。この時の野外資料の処理方法については、拙著『ネ

パール王国探検記』(光文社)の終章に感想ふうにつきし触れておいた。

- ④ 当時用いた方法は、幼稚な初歩的なものだった。以後は、徐々に改良工夫を加えつつ、ほとんど自分の仕事にのみそれを使っていたのであった。他方、共同研究のありかたやそのためのチームワークの重要性については、終戦直後からひきつづき私は関心を払っていた。したがっていつしか次のような発想が私に訪れたのも、いわば宿命である。すなわち、「バラバラのデータをいかにまとめるか」ということと「バラバラの衆知をいかにまとめるか」ということは、「異質の統合」という一点ではまったく同じである。「衆知をあつめる法」(『思想の科学』1962年第5号2-13ページ)という記事を書いたころには、はっきりと両者の自覚的な結びつけを考えていた。
- ⑤ こうして私は1964年に『パーティー学』(社会思想社)を書いたときには、データの啓発的統合法と衆知を集める法とチームワークのあり方との三者を、連合的に考えるようになっていた。そしてこの三者の統合の焦点として、人間の創造性をいかに育てるかを構想したのである。その結果は企業界・技術界・教育界の多くのかたがたの共鳴を得ることとなった。
- ⑥ かような事態の進展の結果、私は、自分だけ使い馴れてきた発想法の技法を、より多くの人びとにわかりやすく体系的に説明せざるを得なくなった。そしてこのような「当惑すべき」状況こそ、常に人を啓発へと追いやるものである。私の発想法は、これを機に、過去二年の間に、各段に整備と体系化の時期に入った。こうしてこの本が生まれたのである。
- ⑦ どんな発想法でもそうであろうが、この本でのべた発想法も、バカになって徹底的に実行してみなければ、けってわからぬ。ところが、「考える」ことを仕事以外のこととして省みなかった人びとは、この実行を避けてやすきにつく。他面、知識人になればなるほど、頭の中だけでわかったつもりで素通りしてしまう。こういうのは「わかった」部類にも入らないのだということが「わからない」のである。多くのかたがたがこの発想法に興味を示された。しかし、一部分でも実行された人の数はうんと少ないようである。そして「バカになって」首尾一貫に徹底して試み、わかって下さったかたは、私以外にまだ一人だけである。
- ⑧ この意味もあって、ここでとりあげた発想法は、いまやテストを必要とする段階に入った。すなわち、できるだけいろいろな分野で、いろいろな状況下で、じっさいに試みた事例を集めるべき「探検」段階を必要としている。不幸にして私は他に本職があり、現在この発想法を研究テーマにするわけにはいかない。しかしこの仕事は、誰かによって本腰を入れてなされねばならない。そういう人

の現れることを、私は切に願っている。その人の手で、この本が徹底的に書きなおされる日がこよう。またそのときに、はじめて本格的なマニュアルができるであろう。

1967年5月

資料 (B) 40版はじめに

- ① ここで扱う「発想法」すなわちアイデアを創り出す方法は、発想法一般ではなく、私の案出した発想法に限られている。発想法という言葉からして、私なりに位置づけたそれであることを、御諒解いただきたい。
- ② その発想法は、もともと野外科学の必要性から始まった。ことに、野外で観察した複雑多様なデータを、「データそれ自体に語りしめつつ、いかにして啓発にまとめたらよいか」という課題から始まっている。かような課題は、科学的方法論としては、今日までまともに解決されたことはなかったのである。日本ばかりでなく国際的にも未解決である。現状においては、その必要性の根源となった「野外科学」という用語さえ、まだきわめて通りが悪い。その意味するものが何であるかは、本文をご覧いただきたい。
- ③ しかしながら、この本の初版の序文を書いた1967年5月にくらべ、その後の発想法の急速な発展と普及ぶりは、まさに隔世の観がある。わずか9年のうちに、発想法の主軸となったKJ法は、日本の津々浦々に知れ渡ってしまった。更に海を越え国境を越えて、世界中に拡がろうとしている。また殆どあらゆる社会階層に浸透しつつある。
- ④ 自分の足もとの仕事をどう処理すべきかという悩みから、産業社会の生んだ畸形的な世界観の生産に至るまで。また、個人・集団、組織・環境といったもの間に、血の通ったパイプが失われ、バラバラに解体しかねない今日の文明の危機を、一転して活性化に向かわしめる道。こういった痛切なニーズに、少なくとも確かな手がかりで応えているからこそ、驚くべき波紋を惹きおこしたのだろう。
- ⑤ いまや普及の量よりも質の向上こそが第一の課題となってきた。幸いにしてKJ法と、それに結びついて密接不可離な野外での取材法とは、私の手もとでその後も各段の躍進をとげている。質量ともに、今ではこの本より桁ちがいに豊かさを増している。一冊の部厚な原典として世に問われる日も近い。この本はKJ法の実技的な手引書としては簡略にすぎるので、その欠点もその原典では懇切に補うつもりである。それでもなお発想法は、バカになって徹底的に実行してみなければ、決して「わかった」部類には入らないのである。そのためには研修も必須であるが、その研究方法と人材も

各段に充実した。有効なハードウェアについても、改善の後が見られる。

- ⑥ とはいえ、この本には野外科学とKJ法の育った初心が盛り込まれており、現在の発達したそれらも、基本的にはこの本で訴えた道を歩いているのである。読み直してみると、いまではもうこのようには書けなくなっているような、それなりの閃きの宿った説明が随所にてでくる。序文だけを書き直して再び世に問う意義を、そこにお汲み頂きたい。
- ⑦ 私にとって兵馬の間に起居したようなこの9年。書物などのんきに書く暇もなかったその年月。その間にKJ法の内外でも数知れぬバリエーションが玉石混濁で現れている。いまや本道がジャングル化する前に、清流化すべき季節がめぐってきたようである。
- ⑧ その清流化のためには、好ましいソフトウェア(標準テキスト)、正則な研修(KJ法や取材法についての)、および、望ましい機器類(たとえばデータカードやKJ手帳)の一体的な活用が、大いに望まれる。これらの三位一体を私は「文化」と呼ぼう。本来、人から人へ伝え得るものはこの文化であるのに、いまの世はその文化の片割れ、つまり、モノとか方法とか研究だけを売買・貸借・贈与の対象だと錯覚しているのではないか。すくなくともこの発想法に関しては、私は「文化の伝達」という人間らしい本道を実践してみたいと思う。そして、足もとの川喜田研究所をその拠点とし、ひいては清流化の拠点とすることにした。KJ法や取材法に関するお問い合わせはここにお願したい。(住所、電話番号、FAXは割愛)
- ⑨ この本とそれに続く「続・発想法」(中公新書)の執筆にKJ法を用い、研修指導にも初期から協力してくれた妻喜美子に、些かの謝辞を呈したい。

1976年5月

(2) 初版と40版の「はじめに」骨子の比較

それぞれの骨子は次の通りである。原文の段落毎の通し番号も載せた。

初版

①自分の発案した発想法は②野外科学のデータの啓発的まとめのものである。③一般的とはいえないこのアプローチは、実際に使われその成果は評価された。④改良を加え、発想法としてバラバラな異質なものを統合することは衆知やチームワークの考え方と連動

していると自覚し⑤人間の創造性の育て方に各界より共鳴を得た。⑥そのため体系的な説明として本書が誕生したが、⑦そもそもバカになって徹底的に実行する人はいない。⑧したがって今後はバラエティーに富んだ多くの事例と、本書の書き直しが期待される。

40版

①自分の発案した発想法は②野外科学のデータの啓発的まとめのものである。③一般的とはいえないこのアプローチは日本国内津々浦々あらゆる階層へ浸透し世界に広がろうとしている。④この統合化は文明の危機を活性化させるニーズとして応えている。⑤普及には質の向上が課題であり詳しい書籍がやがて出版される。それでもバカになって徹底的に実行が必要だ。⑥本書には野外科学とKJ法の初心がある。⑦今後は清流化へと向かうが⑧文化の伝達として川喜田研究所に問い合わせを乞う。

(3) 初版における特徴と考察

段落①②からの流れで、初版では発想法を用いた彼の啓発的まとめが評価されたことが紹介され、その上で、人間の創造性の育て方への共鳴が『発想法』出版へつながったことになっている。バラバラなデータのまとめとバラバラな周知の統合は「異質の統合」の点で同じであるとしている。これは複数のデータから共通点を見出して言語化するというKJ法アプローチ自体を川喜田が行っていたためと想像される。さらにデータの啓発的統合と、周知を集める法と、チームワークの3つの要素から「人間の創造性の育て方」が構想されたことになっている。これも複数のデータから、発想（アブダクション）されたアイデアと考えることができる。つまりこの文章の前半にはKJ法的特点の特徴が

よく表れている。この方向性への社会的賛同があるため、その手続きを体系的にまとめる必要があり本書が生まれたとしているが、バカになって徹底的に実践する者がいないにもかかわらず、誰かが徹底的に書き直してくれることを願っている。

ここに3つの矛盾がある。1つは書籍を発行しているにもかかわらず、それが書き直されることを願うという矛盾、2つ目はバカになって徹底的に実践する者がほとんどいないにもかかわらず、誰かが書き直してくれることを願う矛盾。そして、川喜田の発想法は、川喜田特有の発想法であることを明言しているにもかかわらず、川喜田以外の誰かが実践し書き直すということを想定している矛盾。これらのことから『発想法』が未完成品であることの強い自覚と、不十分さへの後悔が感じられる。

(4) 40版における特徴と考察

段落①②からの流れで、野外科学の啓発的まとめへの志向が社会に受け入れられていることになっている。初版以降、9年間の間にそれなりの確信が抱ける状況になったと考えられる。一方、初版のようにKJ法を活用した人文地理学・文化人類学的研究が評価されるといったKJ法による成果物の報告はない。文明の危機を活性化させるためのアプローチとしてKJ法の量ではなく質の転換が強調され、研修や機材の向上や文化の伝達を行う川喜田研究所の紹介がなされている。将来より良い書籍が発行されることを明言しているが、それでもバカになって徹底的な実践が必要と、初版と同様の主旨が繰り返されている。そして『発想法』が技法の説明として不備が明確であるとしながらも、そこには「KJ法の育った初心が盛り込まれ」「いまではもうこのように書けなくなっているような、それ

なりの閃きの宿った随所にでてくる」として
いる。本書を書き直すのではなく、本書を読
んで欲しい、という逆の訴えとなっていると
読み取れる。この初心云々に関する話題は文
脈として唐突であり違和感がある。それでも
これについて言及せざるを得なかった理由は
2つ考えられる。1つは、著作物として有名
で出版部数でも貢献している本書の内容を全
面否定することは絶版にもつながるため、内
容に意義があることを強調せざるを得なかつ
た。2つ目の理由は、実際に本書には重要な
ことが記述されており読者にそれを読み解い
て欲しいと願っていた。どちらかの理由が正
しいのかはここでは保留とする。その上で妻
が『発想法』と『続・発想法』の執筆に関わ
ったことが言及されている。つまり『発想法』
を執筆した（少なくとも原文の作成）のは、
妻であったということである（注5）。そう
した観点からみると『発想法』の各章の見出
しのつくり方は、KJ法というよりも整理法
的であり、また、川喜田が口述したために記
述による川喜田自身の厳密性を指向した執筆
よりも自由度が高まりそれなりの「閃き」が
生じたのではないかと想像される。初版と異
なり40版ではKJ法の学びは川喜田研究所に
おける指導が有効であることが強調され、か
つ、内容的に有効な要素が含まれていること
を示唆している。なお、KJ法という用語は
40版まえがきには表現されているが、初版
にはまえがき、および本文にも使用されてい
ない。

（5）『発想法』初版までと40版に至る川喜 田の関心事と活動

ここで『発想法』初版と40版前後までの
川喜田の活動ならびに関心事について簡単に
整理する（表1）。その膨大な著作については
『川喜田二郎著作集 別巻』（中央公論社

1998）に詳しいが、戦前には専門分野の論文、
報告がある一方で“人類史”や“アイデアを
出す技術”について雑誌・新聞など幅広く執
筆活動を行っている（注6）。著作（共著）
である『人文地理学入門』は地理学を扱いつ
つ古代の歴史から人類の発展、そして現代の
社会的課題まで論じ“入門”といえども壮大
な学術書となっている。その内容を概ね踏襲
しているのが単著『可能性の探求』である。
そこから鼎談『人類は滅びるか』、共著『人
類学的宇宙論』へと議論は発展していく。本
業と言える学術研究を一般読者用に内容を組
みなおした『ネパール王国探検記』『鳥葬の
国』が出版されベストセラーになるが、これ
らの研究において川喜田はKJ法と呼ばれる
手法の実験を経て、『パーティー学』『チーム
ワーク』でその紹介を行ったことから、手続
きについての問い合わせが増え『発想法』を
執筆せざるを得ない状況となった。『発想法』
執筆に至るまでの、川喜田の人文地理学・文
化人類学といった専門分野、そこから発展し
た全世界・地球の未来への展望、そして衆知
を集める技術・チームワークなどの統合志向
が育まれており、それが同書の内容に反映し
ていることが見て取れる。『発想法』当時、
彼が自分には時間がないとしていたが、当時
の執筆・仕事量からすると確かに彼が個人的
に行っていた技法を他者に十分に説明する余
裕などないことが想像できる。

このように意欲的に執筆活動を行っていた
が、『発想法』初版以降40版までの3年間は
書籍としての著作はなくなった。1969年
には東京工業大学を辞職し、1970年川喜田
研究所を設立し『発想法』の不足を補うかの
ように『続・発想法』、『発想法（KJ法）
による社会科学習』（共著）、『問題解決学』
（共著）を発行、大学生や一般人を集めた問題
解決をテーマにした啓発的合宿「移動大学」の成果

(表1) 川喜田二郎の主たる著作 (1946~1976)

発行年	著作名	補足	出版社	内容
1946	人文地理学入門	村松繁樹との共著	ミネルヴァ書房	文化人類学概論
1957	ネパール王国探検記	副題：人世界の屋根を行く	光文社	エスノグラフィー
1960	鳥葬の国	副題：秘境ヒマラヤ探検記	光文社	エスノグラフィー
1961	日本文化探検	「群像」連載のまとめ	講談社	文化論
1964	パーティー学	副題：人間の創造性を開発する法	社会思想社	人材育成・教育論
1966	チームワーク	副題：組織の中で自己を表現する	光文社	人材育成・教育論
1967	可能性の探求	副題：地球学の構想	講談社	人類論
1967	発想法	副題：創造性開発のために	中央公論社	KJ法
1970	続・発想法	副題：KJ法の展開と応用	中央公論社	KJ法
1970	発想法 (KJ法) による社会科学学習	共著：田中実	明治書院	KJ法
1970	問題解決学	副題：KJ法ワークブック、共著：牧野信一編	講談社	KJ法
1970	人類は減じるか	鼎談：今西錦司、小松左京	筑摩書房	人類論
1971	雲と水と	副題：移動大学奮戦記	講談社	人材育成、KJ法
1973	野外科学の方法	副題：思考と探検	中央公論社	KJ法
1975	人類学的宇宙論	共著：岩田慶治	講談社	人類論
1976	発想法	40版 まえがき	中央公論社	KJ法

を『雲と水と』として出版する。これらには、初版で述べていた「いろいろな状況下で、じっさいに試みた事例をあつめるべき「探検」を彼自身が協力者と共に実践した成果と言える。発想法の技術と並び彼が強調していた野外科学については1973年に『野外科学の方法』を著しKJ法と野外科学との運動についての詳細な解説を試み、1967年『発想法』初版出版当時には不十分であった経験値(知)をある程度積み上げることができたのではないかと考えらえる。その上でKJ法を正しく伝達するためには自分以外にはないという確信に至り、体制も整ったことを周知する広告宣伝的な意図があり、それが40版まえがきに反映されたのであろう。

Ⅲ. 結論(考察)とこれからの調査の方向性

本論は『発想法』初版と40版の「はじめに」を比較検討することで、KJ法という手法の志向性について明らかにすることを試みても

のである。初版1967年から40版1976年までの9年間で彼が得たことは、解説本や研修などでは野外科学の真意や、KJ法の技術およびそこに内在する思想は、自分以外には伝達不可能ということであった。それを少しでも知るためのアプローチとして『発想法』に込められた「初心」を明確にしていくことが作業として想定される。その一旦について、40版の当時では川喜田は明確に述べることができなかった。しかし『発想法』には1984年にそれまでなかった「あとがき」が18ページにわたって追加された。その冒頭は次のようになっている。「この本で強調したように、KJ法の原点には、「人間が全人的に生きるとはどういうことか」を問うているものがある」としている。40版まえがきには「個人・集団、組織・環境といったものの間に、血の通ったパイプが失われ、バラバラに解体しかねない今日の文明の危機を・・・」とあり、現代社会での非全人化への指摘と対をなしている。「あとがき」では管理社会を危惧した「状況」、

そこにKJ法が登場した「転換」、KJ法の可能性について述べた「希望」と章立て、最後に「本流づくり」において「KJ法学園」の設立の決意と（その）「本流ができるまでの間は、ご苦勞でも川喜田研究所とKJ友の会という交流研鑽の同志団体にあえて縁の下の力持ちを演じて頂きたい」としている。川喜田は「本流さえしっかりと根づかせておけば、乱流が自由奔放に流れても、人類のために常に原点に立ち返れるであろう」としているが学園を設立することなく彼は逝去している。「人間が全人的に生きる」ことがKJ法の真意（テーマ）であるとするならば、そして「あとがき」に含まれた「人文地理学的」内容からすると、技術論から飛躍し、民族地理学、地球論・宇宙論まで視野に入れることになるであろう。そこまで問題意識を広げていくと異なる学問領域の研究者・一般人にとって彼を完全に理解していくことは事実上不可能であると言っているであろう。

ここで改めて40版まえがきで彼が述べている「初心」「閃き」について考えたい。文脈として唐突であるが、逆にそれ故に着目すべき論点があるようにも感じられる。具体的には共同研究をする場合の注意や、単位化に関する国レベルでの違いなど、本文において言及されているが、他所ではあまり見当たらない。しかし、それらについて厳密に調査検討をしておらず『発想法』特有のことであるかまでは断定ができていない。それらは「いまではもうこのように書けなくなっているような」ものであるため『発想法』が書かれた時点での特徴的な表現や論理であることが想定される。そこにこそ思想的およびそこに付随する技術の具体・詳細があると仮定して読み解くならば、彼自身が明確に示すことができなかつたヒントを探し出すことができるかもしれない。筆者が次に行うことはそれらの

精査と、そうした志向性に沿った研究がなされているかの実態調査になるのではないかと想像している。

注

- (1) 「看護研究 第50巻第3号」特集 質的統合の現在 グランデッド・セオリーとの比較を中心に考える（医学書院、2017）など。
- (2) 登録486703（商願2004-100231）株式会社川喜田研究所による（2004年～）
- (3) 事件名「野外科学」登録事件（2）、2022年7月16日（行ケ）第94号 審決取消請求事件
- (4) 田中博晃「KJ法クイックマニュアル」外国語教育メディア学会（LET）関西支部 メソドロジー研究部会 2012年度報告論集など。
- (5) 「私もこれらの本（注：『発想法』『続・発想法』）の編集や基礎研修等、川喜田の一連の努力に協力し・・・」といったコメントがある。川喜田喜美子「看護研究 特集：KJ法の思想と技術を学ぶ」（医学書院2006.1。筆者も、川喜田喜美子氏から当時多忙であった川喜田二郎の口述を一生懸命書きとってまとめて執筆した、という話を直接聞いている（2007）。
- (6) 「人類史のフロンティアー（ママ）」思想の科学（1961）、「アイデアを出す技術」東京新聞（1962）などがある。

*本論の特徴上、文中に明確に示された文献等については捨象している

文献目録

川喜田二郎『発想法』

1967（1976.40版まえがき追加、1984.あとがき追加、2017.改版.1984版と同じ内容で文字）

